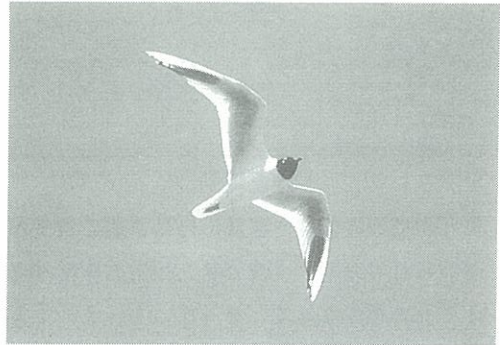


## 日中ズグロカモメ共同調査

岡 部 海 都 \*

ズグロカモメ (*Larus saundersi*) は、カモメ目カモメ科に属す全長33cmの小型カモメ類である。冬に海岸や河川などで普通にみられるユリカモメによく似ているが、やや小型でくちばしが太くて短いのが特徴であり、種名の由来は夏期に頭部が黒くなることからきている。広い泥質の干潟に渡来し、カニ類を好んで捕食する。

ズグロカモメの生態については1980年代半ばまでほとんど知られていなかったが、1984年に中国江蘇省塩城自然保護区において初めて繁殖が確認され、その後中国沿岸の数カ所で繁殖コロニーが発見されており、その生態も少しずつ明らかとなっている。日本では、1970年代は稀な冬鳥であったが、1980年代に入り西日本の各地で少数が越冬するようになり、80年代後半から90年代前半に渡来数が急激に増加した。世界の総生息数は約3,000羽程度といわれており (Wetlands international, 1997)、1996年版のIUCN (国際自然保護連合) のレッドリストでは、絶滅危惧 I B類として掲載されている。日本では、環境庁のレッドデータブックが発表された1991年の時点では、まだ数の少ない冬鳥という認識であったこと、世界の総数がまだあまり知られていなかったことなどからレッドデータブックには掲載されなかった。しかし、1997年に



飛翔するズグロカモメ

発表された環境庁のレッドリストには絶滅危惧 II類として掲載されている。日本への渡来数は、WWFJ (世界自然保護基金日本委員会) の調査により、毎年約1,000羽が渡来することが知られるようになった。長崎県諫早湾、佐賀県大掬、鹿島海岸、福岡県曾根干潟、熊本県球磨川河口では100~300羽が渡来していたが、諫早湾では1997年の堤防閉め切りにより渡来数が激減した。

曾根干潟は、北九州市の南東部に位置し、周防灘に面しており、干潮時には約500haの砂泥質の干潟が出現する。一年を通じて多くの野鳥が渡来し、ズグロカモメ、ツクシガモ、ダイシャクシギなどの日本最大規模の越冬地となっているほか、渡りの時期には多数のシギ・チドリ類が訪れる。

一方、曾根干潟を含む周防灘沿岸地域は新

\* (財)九州環境管理協会・環境部生物課



### 調査場所

北九州空港の建設や東九州自動車道の整備が進められており、今後の北九州市の発展を考える上で重要な地域となっている。このような干潟および周辺環境の中で、干潟の保全、利用の方法を検討するために北九州市では1995（平成7）年度から曾根干潟の環境調査を実施し、その結果、曾根干潟には約200羽のズグロカモメが越冬することが判明し、国内のみならず世界的に有数のズグロカモメの越冬地であることが明らかとなった。ズグロカモメの保護を検討するためには、曾根干潟に渡来するズグロカモメがどこから来るのか、どのようなコースを通ってくるのかなどの基礎的なデータが必要となるが、その生態に不明な点が多いため、既存の資料では不十分であった。そこで、中国の担当部局である林業部と連絡を取り、共同でズグロカモメの調査を行うことを呼びかけ、1996（平成8）年度から中国と共同でズグロカモメの調査を行うこととなった。

私が参加したのは、中国での現地調査の2回目となる1997（平成9）年および1998（平成10）年の2回である。調査に訪れた遼寧双台河口国家级自然保护区は、渤海湾の最奥部、

中国遼寧省盤錦市（人口約111万人）の双台子河の河口部に位置する面積約800km<sup>2</sup>の国レベルの自然保護区である。この保護区は中国最南端のタンチョウの繁殖地保護のために設定されたものである。タンチョウの繁殖地の南限となっているほか、渡りの時期にはツル類をはじめ、渡り鳥の一大中継地として重要な場所となっている。1989年にズグロカモメの繁殖が確認されて以来、ズグロカモメの繁殖地として有名になった。保護区の大部分は製紙原料用のヨシを収穫するための世界最大規模の商業用ヨシ原となっている。また、同地域とその周辺一帯は中国第3位の産油量を誇る油田地帯となっており、広大なヨシ原のなかに油井が点在している。

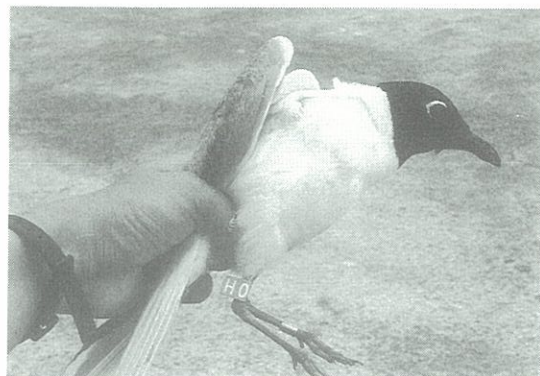
調査に訪れたのは1997年、98年ともズグロカモメの繁殖期にあたる6月中旬で、期間は13日間であった。中国側は地元の双台河口国家级自然保护区の研究員のほか、林業部全国鳥類環志中心（中国の鳥類標識調査センター）などのスタッフが参加した。中国での調査の目的は、①ズグロカモメの繁殖状況の調査、②ズグロカモメへの標識の装着および標識個体の確認、③保護状況の視察、ズグロカモメの保護、研究に関する意見交換などである。



調査風景



ふ化直後のズグロカモメのヒナ



標識を装着したズグロカモメの成鳥

### ①ズグロカモメの繁殖状況の調査

繁殖状況の調査項目は、成鳥の個体数、巣の数、卵の有無、個数、コロニーの植生について記録を行うものである。成鳥の個体数の把握は、調査のため繁殖コロニーに近づくと、抱卵、休息していたズグロカモメがすべて飛び立ち、警戒して上空を飛び回るため、このときにズグロカモメをカウントする。飛翔中の鳥のカウントは難しく、個人差も大きいと考えられるため、カウントはすべてのコロニーで同一人物が行った。ズグロカモメの繁殖コロニーの環境は大別すると2つあり、1つは大潮期の満潮時には潮が上がってくるマツナ類の繁茂した塩性湿地、もう1つは乾燥した植生のまばらな河川の氾濫原や造成地で、本来の生息環境としては塩性湿地ではないかと考えられている。塩性湿地での調査は、干潟での調査となるため、泥だらけになるうえ、繁殖密度が低い場合が多く、巣やひなを発見するのが困難な場合が多い。一方、氾濫原や造成地での調査は、乾燥しているため、汚れることもなく、繁殖密度も高いところが多いため調査は楽である。全員でコロニー内に入り、地面に作られる巣を探して歩き回る。巣を発見すると、卵やひなの数を記録し、ダブルカウントがないようマークを付けていく。

ひなを見つけた場合は標識の装着と測定を行った。

なお、繁殖コロニーに長時間入ると、卵の成長に悪影響が出たり、場合によってはコロニーを放棄することも考えられるため、コロニーの大きさに応じて時間を制限して調査を実施した。

### ②ズグロカモメへの標識の装着および標識個体の確認

本共同調査の最大の目的である繁殖地と越冬地の移動の証明、渡りルートの解明は、すべてこの標識の装着作業から始まる。使用した標識はプラスチック製のレグ・フラッグと、金属リングの2種類である。レグ・フラッグは野外観察でも個体の特定ができるようにアルファベットや数字が大きく刻印されたもので、中国で使用したものは赤色で、白抜きの数字あるいはアルファベットを組み合わせたものである。曾根干潟で放鳥したものは、黄色で黒の数字2文字の組み合わせとなっている。上記の繁殖コロニーの調査中に発見したズグロカモメのひなの足にレグ・フラッグを装着するのであるが、ズグロカモメのひなは草陰に隠れていることが多いため発見はかなり困難であり、根気のいる作業である。ヒナ

の場合、死亡率がかなり高いため、死亡率の低い成鳥に対する標識の装着も実施した。成鳥の捕獲方法は、卵のある巣にテグスで罟を仕掛け、20～50m離れた地点に観察用ブラインドを設置し、その中から成鳥が戻ってくるのを待ち、巣に戻ったところでテグスを引き、足をくくって捕獲するというものである。私は主にこの成鳥の捕獲を担当したが、非常に難しく、一日中ブラインドにこもって捕獲を試みたが、まったく捕獲できない日もあり、そのような日にはひどく落ち込んだものだ。しかし、ブラインドの中に入っていると、警戒心の強いズグロカモメもかなり近距離で観察できるため、写真やビデオなどの撮影を行うことができた。

標識を装着したズグロカモメを探すのも重要な目的の一つであるが、曾根干潟で放鳥した黄色のレグ・フラッグ装着個体は残念ながら未だ発見されていない。当保護区で放鳥された個体については、数羽が確認されている。

### ③保護状況の視察、ズグロカモメの保護、研究に関する意見交換

中国では、ズグロカモメは一級の保護動物として手厚く保護されている。当保護区では、ズグロカモメの繁殖地として永久保護区および3カ所の人工的な繁殖地（人工島）の造成を行っている。永久保護区は90年台前半にズグロカモメの営巣が確認された場所で、現在は草地化が進んでいるため、ズグロカモメの繁殖は行われていない。人工島は、塩性湿地内の干潟の泥を円形状に積み上げ、直接潮が上がってこないようにしたもので、一時的

には繁殖地として利用される。かなり高密度の営巣地となるため、一度獣などの捕食者に発見されると卵やひなだけでなく成鳥まで襲われてしまうこと、放置するとすぐに草が茂り営巣できなくなってしまうなど問題点も多いが、捕食者対策や潮の流入の管理を行うことによって、有効な繁殖地となると考えられる。塩性湿地などの自然状態の繁殖地についても保存されるよう努力するとのことであった。また、ズグロカモメの人工飼育の研究も行われている。



和白干潟に渡来した標識ズグロカモメ

今回の日中共同調査により、ズグロカモメの繁殖状況や中国側の保護対策などが明らかとなった。また、中国で放鳥されたズグロカモメが西日本各地の干潟や韓国で確認されており、中国の繁殖地と越冬地の移動が証明されたほか、越冬期の移動の状況などのデータも明らかになりつつある。これからも渡りルートや寿命など数々のデータが得られるものと期待される。また、中国の研究者との交流も引き続き行われる予定であり、日本でのズグロカモメの積極的な保護が行われることが望まれる。